

本論文は、乳児の泣き声に対する反応に関わる要因に関して、心理・生理学的側面から検討を行ったものである。

序論では、本研究の背景として児童虐待問題の現状、およびその発生機序に関する先行研究を概説する。そして、児童虐待研究のために乳児の泣き声に対する反応に着目する意義および有効性を指摘する。

第2章では、各論に先立ち乳児の泣き声に対する反応性に関する先行研究を概観し、本論文で扱う具体的な問題を提起する。近年の機能的磁気共鳴画像法等の脳画像イメージング手法を用いて乳児の泣き声刺激に対する神経活動を測定する研究が行われ、乳児の泣き声の処理に関わる養育者の神経反応のモデルが複数提案されている。それらのモデルに共通して、乳児の泣き声の入力によって情動をボトムアップに生起させる機能と、それをトップダウンに制御する機能を想定している。しかし、そこで想定される心的機能の役割は実証的に検討が行われていない現状があった。本研究では、Belsky (1984)の養育行動のプロセスモデルを基盤としつつ、上記の泣き声に対する神経反応のモデルで提案された乳児の泣き声の心理・生理的な処理過程を実証的に明らかにすることを目的とする。

第3章では、養育者自身の被養育経験に焦点を当て、その効果および調整要因の検討を行った。研究1では、泣き声の制御困難性に着目した。泣き声が止まる確率と被養育経験との交互作用が泣き声に対する交感神経系指標である α アミラーゼの活性に及ぼす影響を検討した。その結果、泣き声の制御可能性によらず、被養育経験によって泣き声聴取による交感神経系の活動パターンに差異が生じることが示された。

研究2では、オキシトシン受容体遺伝子多型 rs 53576 を解析し、被養育経験との交互作用、さらに両要因が認知的負荷の効果に及ぼす調整効果を検討した。その結果、オキシトシン受容体遺伝子多型において G アレルを持つ母親は被養育経験の影響を受けやすく、さらに認知的負荷により泣き声に対する不適切な養育意図をより高く評定し、泣き声に対する行動課題の成績が低下することが示された。

第4章では、自己制御が乳児の泣き声刺激の処理において果たす役割を詳細に検討することを目的とした。研究3では、乳児の泣き声に対する共感感情・行動意図に対して、認知的負荷が与える影響を検討した。その結果、認知的負荷によって泣き声に対する利他的な共感感情である共感的関心の評定が低下すること、およびその低下が媒介となって、泣き声に対する世話意図を低下させることを示した。研究4では、泣き声に対する行動・自律神経系の反応に自己制御が果たす役割を検討するため、認知的負荷を操作す

る課題中に参加者の重心移動と心拍を計測した。その結果、認知的負荷が高い状況では乳児の音声刺激に対して接近し、心拍が上昇することが示された。

第5章では、泣き声の入力によって生じるボトムアップの情動・ストレスの生起に影響を与える要因を検討した。研究5では、オキシトシンと音声に対する重心移動の関連を検討した。その結果、オキシトシンレベルが低い養育者ほど乳児の泣き声に対して接近することが示された。研究6では、泣き声を聴取する状況における配偶者のサポートが α アミラーゼレベルの活性に及ぼす影響を検討した。その結果、愛着スタイルの一側面である愛着不安が高い母親において、夫が隣にいる条件で α アミラーゼレベルが低下することが示された。

第6章では、乳児の気質特性と乳児の泣き声に対する反応性の関連を検討した。まず研究7で実施コストの点で実験室実験より簡便である質問紙研究に着目し、乳児の泣き声に対する態度を測定する Infant Crying Questionnaire (Haltigan et al., 2012) の日本語版を作成した。そして、原版で想定された因子構造を日本語版も持つこと、および原版と類似の概念を測定する尺度であることを確認した。その上で、研究8では ICQ 日本語版と乳児の気質を測定する質問紙を母親を対象に1か月間隔で3度配布し、ICQ 得点の縦断的な変化過程と乳児の気質との関連を検討した。その結果、乳児の泣き声に対する態度が情動の崩しやすさおよび回復のしやすさに関わる気質の発達に影響を及ぼすこと、および乳児の気分の高まりやすさが、後の乳児の泣き声に対する態度を予測することが示された。

第7章では、第3章から第6章までの知見をまとめ、Belsky (1984) の養育行動のプロセスモデルに基づきながら、乳児の泣き声に対する反応に特徴的な養育者の心理・生理的反応の形成モデルを提案する。また、本論文による児童虐待研究に対する貢献の可能性を議論した。さらに、本論文は児童虐待という社会的問題をテーマとしているが、その解決に向けた社会デザインの構築に向け、本論文が果たした役割と今後の具体的な展開可能性を議論した。最後に、本論文が抱える問題点を挙げ、今後本研究が取り組むべき課題と共に議論を行い、本論文の結びとした。